

女子大学生の学習意欲と幼児への運動遊びの指導との関係について —運動遊び「チャレンジシリーズ」を通して—

山 本 恵 美

The Relationship between Learning Motivation among Female University
Students and Instruction of Physical Play to Young Children:
Using the *Challenge Series*

Megumi YAMAMOTO

要 旨

本研究は保育者養成課程における運動遊びに着目し、女子大学生の意欲的な学習の取り組み、学生の技術習得、子どもの理解、および運動遊びの指導の関係を調べた。「幼児体育Ⅱ」の授業の運動遊び「チャレンジシリーズ」(けん玉・竹馬・お手玉・フラフープ・紐ごま)を対象としてアンケート調査を行った。授業内で運動遊びの各種目に繰り返し取り組むことで、学生自身ができた喜びを実感し、学んだことを友達に伝えたり、コツをわかりやすく伝えたりしていた。意欲的に取り組んだ学生は、自分なりに運動遊びのコツをつかみ、保育者を目指す上での大切な経験と学びをしていた。一方、運動遊びのコツがつかめず上達しなかった学生もいた。授業を進める上で、学生の意欲をより高め、到達目標に向かって努力することができるよう段階を踏んだ取り組みに配慮し、学生同士のつながりと学び合いを深めていく必要がある。

キーワード：幼児教育、保育専攻学生、運動遊び、意欲

は じ め に

幼児期の運動遊びから得られる成功体験によって育まれる意欲や有能感は、体を活発に動かす機会を増大させるとともに、何事にも意欲的に取り組む態度を養う¹⁾。しかしながら、現代の幼児の運動遊びは、活発に体を動かして遊ぶことが少なくなっており、多様な動きの獲得時期の遅れや、体力や運動能力の低下が幼児期における身体活動の問題としてあげられている。文部科学省²⁾の調査によると、外遊びの時間が多い幼児ほど運動能力が高い傾向にあったが、4割を超える幼児の外遊びの時間が1日1時間未満であったことが報告されている。また、遊びの相手については、家庭では2人以上の友達と遊んでいる幼児が多く、1人で遊ぶことが多い幼児も約1割いることが報告されている。つまり、幼稚園や保育園、認定こども園での活動が、唯一、複数の友達と遊ぶことができる機会になっている。

日本小児保健協会³⁾は平成12年の調査で、よく行う遊びについて「お絵かき、粘土、ブロックなどの造形遊び」という答えが62%だった。10年後の平成22年の調査では、造形遊びは75%で1

位となり、外遊びの機会の減少に伴って、子どもの運動能力の低下による身体発達への影響、遊び場の安全性の確保など様々な問題があげられている。地域の中で子ども同士が年齢を問わず遊びを共にし、運動能力を自然に身につけていたが、子どもの間で遊びを伝承すること自体が難しくなっている。

現代の子ども達を取り巻く環境の変化や多様な問題を意識し、保育現場では健全な身体の発達を促す遊びが展開されるよう、環境を通して遊びの指導が行われ、子ども達が楽しく体を動かせるように様々な工夫をしていくことが求められている。しかし、子どもを育成する立場である保育者自身の外遊びの体験不足などにより、幼児が遊びながら楽しく運動するような指導がうまくできないなどの状況が見られることが、指導者の問題点として指摘されている⁴⁾。実際、運動遊びを扱う「幼児体育Ⅱ」の授業においても、初めて鬼遊びや伝承遊びなどを体験する学生もおり、遊び方やルールを説明するところから始めることも少なくない。この現状では、子ども達への運動遊びの指導が十分にできず、子ども達の運動遊びの機会を減少させてしまうことは否めない。保育者養成校として保育者を目指す学生がいろいろな運動遊びを意欲的に学修し、運動遊びの楽しさを伝えられる力を身に付けていけるよう指導していくことが重要である。

中島ら⁵⁾は、保育者を含めた教員養成課程における体育的活動を伴った授業のあり方として、「失敗を恐れず、仲間と囲まれた中で認められながら、理論と実践を結びつける力をコツコツとつけていく授業づくり」という観点から、運動有能感を高め獲得する場や、自信をもって指導ができるレベルの理論・知識の蓄積と教授の機会設定の必要性を述べている。保育者を目指す学生が、運動遊びの楽しさやその方法を子ども達に伝えられるようになるために、学生が運動遊びを意欲的に取り組んだり、学生同士が互いに教え合いながら関わるなどの体験をしたりすることで、子どもの気持ちを理解し運動遊びを指導することにつながると考えられる。保育者を目指すものとして、実体験があつてこそ、子どもの気持ちを理解し、心身の発達段階に応じた助言や声掛けができるようになるのではないだろうか。前橋ら⁶⁾は、運動ができるようになることだけを目標にするのではなく、できない子どもには自信がもてるように、現段階でその子ができるとされる課題より、一段階やさしい課題を与えて『できた』という達成感を味わわせることが指導者にとって大切であると述べている。また、運動の苦手な子どもにあつては、その子どもの長所を見つけ、その良い点を他児に紹介することで自信をつけさせることができるとしている。このような主張は、運動遊びの学修に意欲的に取り組み、仲間と関わり学び合う体験をした学生ほど、保育者としての能力と技能を習得し、遊びの楽しさや達成感などを味わうことや、子どもを理解し、技術を習得するまでのコツなど、運動遊びの指導の仕方を身に付けた保育者に成長することができるかと考える。

本研究では、保育者養成課程における「幼児体育Ⅱ」の運動遊びに着目し、学生の意欲的な学習の取り組み、学生の能力や技能の習得、子どもの理解、運動遊びの指導の関係を検討することとした。具体的には、運動遊びを扱う「幼児体育Ⅱ」の授業内における運動遊び「チャレンジシリーズ（※注1）」の時間を対象とし、この検討を通じて、保育者養成課程における運動遊びを教授する上での課題を明確にしていきたい。

研究の対象と方法

2016年度後期Y女子短期大学における「幼児体育Ⅱ」の受講者148名を対象とした。

授業「幼児体育Ⅱ」における、運動遊び「チャレンジシリーズ」の取り組みに関するアンケート用紙を作成した。アンケートの内容は、対象者が授業にどのように取り組んだか、遊びの種目における「態度」や「意欲」について問う内容のもと、その取り組みの中で何を学び習得したかについての54項目に加え、学生自身が指導者として取り組む上での指導者観について問う9項目の計63項目で構成した。

アンケートの実施にあたり、対象者へは調査の意義を伝え、研究参加への同意を得た。また、アンケートに回答することに対する不利益はないこと、個人名が公表されることはないことなどを口頭および文書で説明し、授業終了後、アンケート調査を実施した。アンケート回収率は96.6%（143/148例）であり、回収できた回答は全て有効回答であった。

結果と考察

図1に、「意欲をもってチャレンジシリーズに取り組むことができましたか？」の質問項目に対する回答をまとめた。「とてもそう思う」の回答は55人、「そう思う」77人、「どちらでもない」10人、「あまりそう思わない」1人、「そう思わない」0人の回答が得られた。「とてもそう思う」「そう思う」と回答し、意欲をもってチャレンジシリーズに取り組んだ学生が132人であったことから、対象者は意欲的な集団であることがわかった。

図2に、運動遊びの種目における「授業以外で取り組めるよう環境を整えることができましたか？」の質問項目に対する回答をまとめた。「とてもそう思う」、「そう思う」の回答は、けん玉104人、竹馬18人、お手玉89人、フラフープ44人、紐ごま45人であった。けん玉やお手玉については肯定的意見が多数を占めた。けん玉は、事前に付属幼稚園で子ども達に取り組んでいる様子を紹介したことや、教育実習で実際に子どもがけん玉遊びをしている様子を目にする機会があったことが影響していると考えられる。お手玉については、チャレンジシリーズに取り組むまでにお手玉を制作してみるよう呼びかけたことから、学生自身、環境を整えようとする気持ちにつながったと考えられる。一方、竹馬やフラフープは十分な準備ができなかったことや、紐ごまはあまり身近に感じられていなかったことから、学修の環境を整えることができなかったようであ

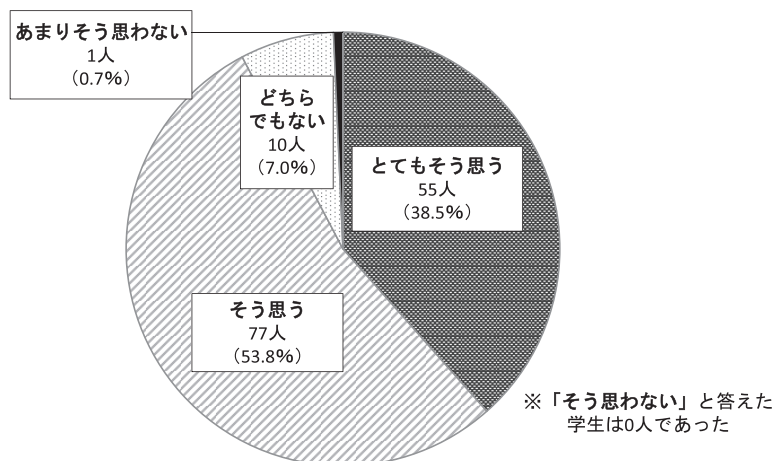


図1. 意欲をもってチャレンジシリーズに取り組むことができましたか？

る。以上の結果は、授業の中で、保育現場における子どもの遊びの様子を伝え、環境を整える必要性を認識できるようにかかわることで、学生の環境を整えようとする気持ちを高めることができると考えられる。

図3に、各種目における「上達するために授業以外でどのくらい練習しましたか?」という質問に対する回答をまとめた。自分で時間を作り練習に取り組んでいた学生は、けん玉139人、竹馬78人、お手玉135人、フラフープ102人、紐ごま86人であった。項目によって差が見られたものの、授業外でも練習し、運動遊び「チャレンジシリーズ」に意欲的に取り組んでいた。これらのことは、継続し長期的に取り組んでいくことで、自分なりに取り組めるよう環境を整えたり、繰り返し練習したりし、意欲をもって運動遊び「チャレンジシリーズ」に取り組む姿勢につながる

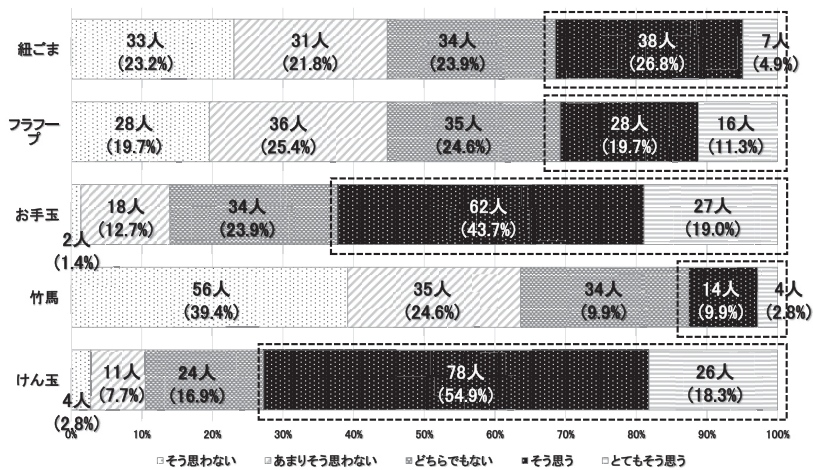


図2. 授業外で取り組めるよう環境を整えることができましたか?

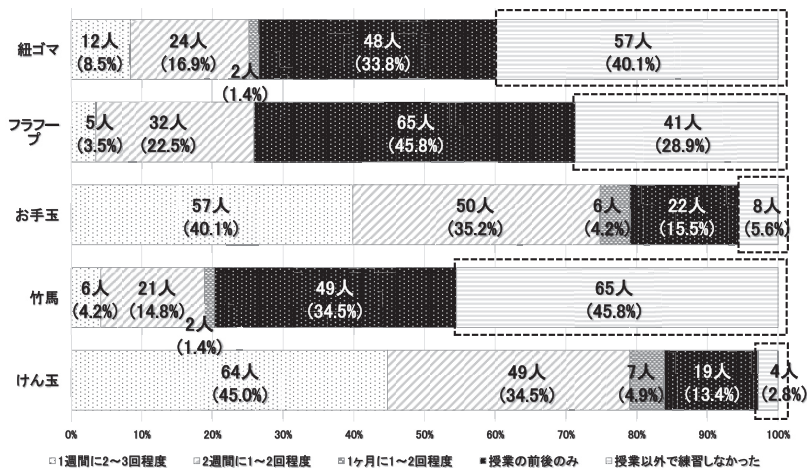


図3. 上達するために授業以外でどのくらい練習しましたか?

ことを示している。

図4に、「チャレンジシリーズに取り組んでみて達成感を感じることができましたか？」の質問項目の回答をまとめた。「とてもそう思う」76人、「そう思う」63人、「どちらでもない」3人、「あまりそう思わない」1人、「そう思わない」0人という結果になり、97%の学生が達成感を感じていた。

図5に、各種目における、運動遊びの上達度について学生が自己評価した回答をまとめた。「まあまあ上達した」、「とても上達した」と自己評価した学生が50～83%であった。このことから、意欲的に取り組むことで上達し、成果が得られ、自信がもてるようになると思われるのではないだろうか。上達したと自己評価している学生の理由としては「練習したから」と回答した学生が最も多かった。続いて「コツがつかめた」、「友達に教えてもらったから」という回答であった（表1）。上達しなかった理由としては、「コツがつかめなかった」、「難しかった」

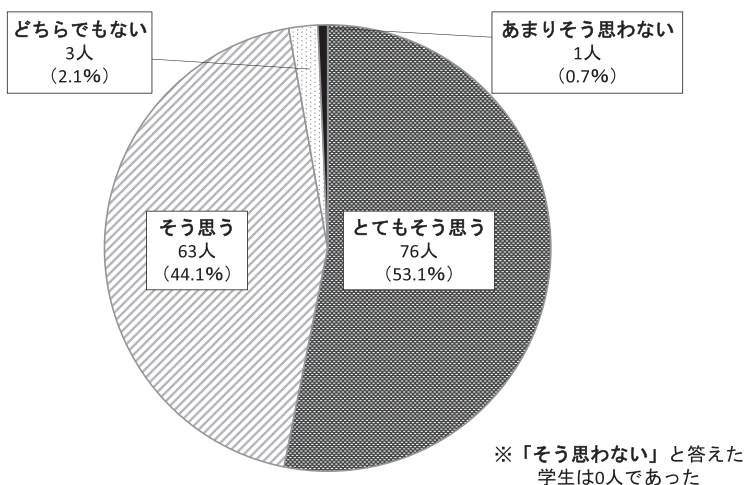


図4. チャレンジシリーズに取り組んでみて達成感を感じることができましたか？

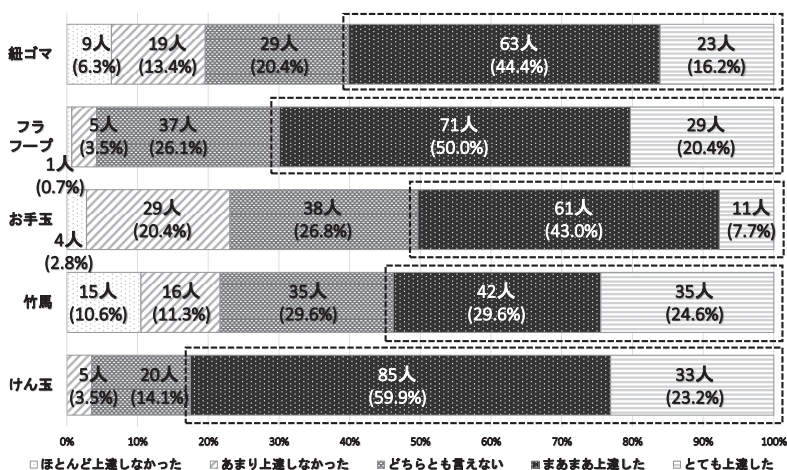


図5. 初めと比べてどのくらい上達しましたか？

表1. 上達したと思う学生の理由（人：複数回答可）

回答	けん玉	竹馬	お手玉	フラフープ	紐ゴマ
練習したから	84	39	54	54	45
簡単だったから	1	5	0	10	2
これまでの経験があったから	32	36	11	40	26
コツがつかめたから	58	26	16	19	27
やってみたらできたから	7	12	3	14	11
運動が得意だから	1	1	0	3	0
友達がしている姿を見て真似できたから	20	9	12	13	16
友達に教えてもらったから	51	18	21	19	40
自分のものを用意したので愛着があったから	13	0	11	2	1
その他	7	13	18	11	13

表2. 上達しなかったと思う学生の理由（人：複数回答可）

回答	けん玉	竹馬	お手玉	フラフープ	紐ゴマ
練習しなかったから	1	11	8	4	9
難しかったから	9	22	28	3	16
今まで経験したことがなかったから	2	9	9	1	5
コツがつかめなかったから	6	8	21	2	11
取り組んでみたができなかったから	5	10	12	3	2
運動が苦手だから	1	2	0	0	0
友達の真似をしてみたができなかったから	2	5	7	0	7
誰も教えてくれなかったから	0	0	0	0	0
自分のものを用意しなかったから	0	4	0	1	3
その他	47	33	30	37	37

という回答が上位にあり、「練習しなかったから」と答えた学生は少数であった（表2）。

上達したと自己評価している学生に、「練習」、「コツ」、「友達に教えてもらったこと」の具体的な内容を記述してもらったところ、「練習」については「体の使い方」、「タイミングの取り方」など、その種目が上達するポイントを見つけるきっかけになり、自身で練習方法を探っていた。さらに、「繰り返し練習する」や「挑戦する」などの積極的に取り組む姿勢に関する記述も見られた。一方、上達しなかったと自己評価した学生はどの種目においても具体的な記述はほとんどなく、練習方法そのものが見つからないようであった。「コツ」についての質問では、どんなコツが掴めたか、掴めなかった人はどのような努力をしたか自由記述の内容を比較してみると、自己評価の高い学生の方が上達のためのポイントを的確につかんでいることがわかった。「友達に教えてもらったこと」については、上達しなかったと答えた学生も、上手な友達にコツを教えてもらったり、真似たりしていくうちにいろいろな練習方法やコツを得て、周りの人から教わりながら学んでいることがわかった。上達したと感じた学生もそうでない学生も、互いに教え合い学び合うことで、コツを習得したり、やり方やポイントの伝え方を学んだり、相手の気持ちに立って声を掛けるかわりを学んだりしていた。このことは保育者を目指す学生にとって重要な経験であると考えられる。

また、「幼児体育Ⅱ」の授業内で運動遊び「チャレンジシリーズ」に取り組む体験を通して、保育者にとってどのようなかわりが幼児に必要と考えるか質問した。「とてもそう思う」の回答数が最も多かった項目は『子どもとともに楽しみながら取り組む』で、続いて『子どもの気持ちを理解する』、『友達同士、教え合えるようにする』、『意欲をもたせる声掛けの大切さ』、『子どもが取り組む様子を見守る』、『取り組む中でうまくいかない理由を探りアドバイスする』、『手本となる』、『競争心をもたせ刺激し合う』、『(練習回数を)○回と決めて取り組む』の順であった

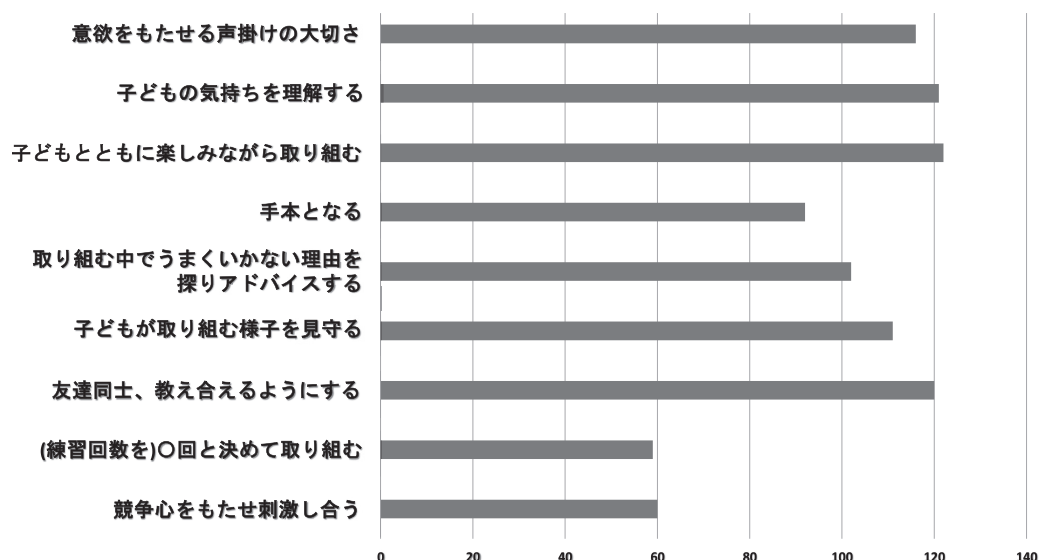


図6. どのようなかかわりが幼児にとって必要ですか? 「とてもそう思う」と答えた人数 (人)

(図6)。この結果から、保育者が子ども達に運動遊びを行う際、楽しく取り組めるようにすること、子どもの気持ちを理解しながらかかわること、子ども同士がかかわり教え合えるような機会を作ること、意欲をもたせるような声掛けをすることなど、の援助を学生が重視していることがわかった。

以上の結果より、授業「幼児体育Ⅱ」の運動遊び「チャレンジシリーズ」に意欲をもって取り組むことは、自分に自信がもてるだけでなく、友達に対しても自分が得たコツを伝えたり、相手の気持ちに立って声を掛けたりすることができるようになる、ということを示している。

これまで、授業「幼児体育Ⅱ」で運動遊び「チャレンジシリーズ」に取り組む中で、学生の能力や技能の上達が難しいときには、上手な人が取り組んでいる様子を紹介したり、互いにコツを伝え合えるようきっかけを作ったり、相手の気持ちを考えながら声を掛けたりすることの重要性について、学生に指導や助言をしてきた。初めは自分のことで必死だった学生も、徐々に仲間へアドバイスをするようになり、友達が上達すると自分のことのように喜ぶ姿も見られるようになった。保育者を目指す学生にとって、授業「幼児体育Ⅱ」で運動遊び「チャレンジシリーズ」に取り組む体験は子どもの気持ちを考えたり、励ましの声を掛けたり、子どものつまづきや状態に応じてアドバイスをしたりする力につながると考えられる。

しかし、意欲はあっても思うように上達せず、「難しかった」、「できる気がしなかった」という感想をもった学生が存在した。岡澤ら⁷⁾が作成した「運動有能感の構造とその定義」にもあるように、「努力すれば、できるようになるという自信」、「教師や仲間から受け入れられているという自信」などの有能感をもたせることができるよう、運動遊びごとに段階を追った内容を提示し、一人一人に応じた配慮をすることも必要である。また、学生達は、適切に承認されたり、友達と十分に交流する環境を整えたりすることで、より意欲をもって取り組めると考えられる。そのため、丸井ら⁸⁾も述べているように、運動が苦手であったり、体育が嫌いであったりする学生

に配慮するとともに、学生のレディネスに配慮したグルーピングを行うということも忘れてはならない。また、安心して学び合える仲間と積極的に活動できる雰囲気作りや、学生同士良いところを認め合える仲間づくりといったことが、授業を行う上で大切になってくると思われた。授業「幼児体育Ⅱ」での経験は、幼児の気持ちに寄り添い、運動することの楽しさや頑張りに気づき励ますことのできる保育者養成につながっていると考えられる。

ま と め

本研究は、「幼児体育Ⅱ」の授業における学生の意欲的な学習の取り組みと、学生の技術習得や子どもの理解、運動遊びの指導の関係についてアンケート調査と分析を行った。

授業「幼児体育Ⅱ」の中で、学生が運動遊び「チャレンジシリーズ」に取り組むことは、自分なりに運動遊びのコツを掴むとともに、子どもへの指導の方法やかかわり方を学び、将来保育者を目指す上で、大切な経験と学びとなっていることが明らかとなった。また、学生同士の交流を深め、励まし合ったり認め合ったりできる友達関係を築くことで、学生の意欲を高め、学びをより効果的にすることができる。さらに、学生一人一人に応じて段階を踏んだ取り組みを考慮することは、学生の有能感を高め、さらなる学習意欲へとつながる。

以上のことから、この取り組みは、幼児教育にとって有益な教授法であるとともに、「運動の楽しさを伝えられる保育者」に学生を近づけていけるのではないだろうか。

※注1…この時間は、「幼児体育Ⅱ」の授業の中で、伝承遊びを中心とした運動遊び（けん玉・竹馬・お手玉・フラフープ・紐ごま）に学習カードを利用してチャレンジしていくものである。運動遊びなどの体育的活動の学習意欲を高める有効な方法の1つとして、学習カードの活用が知られている⁹⁾。学習カードは、意欲的な学習を促進するだけでなく、学びの形跡を視覚的に捉えることで、学習の振り返りや次の目標設定につなげることもでき、さらなる学習意欲の向上にもつながると期待される。

また、この運動遊び「チャレンジシリーズ」は、技術の習得だけが目的ではなく、遊びを実際に体験することで運動遊びの楽しさや面白さを知り、技術習得の過程で苦勞した体験や友達との話し合いや助言により習得することができた喜びを共有できる場や機会を設定している。

引 用 文 献

1. 文部科学省. (2012) 幼児期運動指針ガイドブック・第1版, 第1章: 幼児期運動指針について. pp. 5-18, 株式会社サンライフ企画, 東京.
2. 文部科学省. (2011) 体力向上の基礎を培うための幼児期における実践活動の在り方に関する調査研究報告書.
http://www.mext.go.jp/a_menu/sports/youjiki/index.htm
3. 衛藤 隆. (2011) 幼児健康度に関する継続的比較研究. 平成22年度厚生労働科学研究費補助金 成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業 平成22年度 総括・分担研究報告書. pp. 4-17, 2011.
4. 中央教育審議会. (2002) 子どもの体力, 2011. 向上のための総合的な方策について (答申).
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/021001a.htm
5. 中島 憲子, 田村 孝洋, 古賀 範雄. (2017) 体育における学習意欲の変容からみた教員養成カリキュラ

- ム改善への課題. 中村学園大学・中村学園大学短期大学部 研究紀要 第49号 : pp. 83-89.
6. 前橋 明, 田中 光. (2008) 第3章: 運動のつまずきと子どもへの対応, 幼児体育 理論と実践・第1版 (日本幼児体育学会編) pp. 27-39, 大学教育出版, 岡山.
 7. 岡澤 祥訓, 北真 佐美, 諏訪 祐一郎. (1996) 運動有能感の構造とその発達及び性差に関する研究. 奈良教育大学 スポーツ教育学研究 Vol.16, No. 2 : pp. 145-155.
 8. 丸井 一誠, 井邑 智哉. (2015) 女子短大生における幼児への運動遊びの指導に関するグループ学習の効果—運動有能感と心配に着目して—. 金沢星稜大学 人間科学研究 第9巻 第1号 : pp. 31-34.
 9. 砂川 力也. (2016) 児童を対象とした器械運動の段階的指導法: 宮古島市での実践報告とアンケート調査結果. 琉球大学理学部紀要 第23号 : pp. 99-109.

[2017. 9. 28 受理]

コントリビューター: 森田 泰博 教授 (薬学科)

